

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

ヨハンナ・シュピーリ作『ハイジ』の研究 (III)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/808

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ヨハンナ・シュピーリ作 『ハイジ』の研究 (III)

南 は る つ

I. 続編の問題

現在日本では、『ハイジ』の続編と称するものが2種類出版されている。それはシャルル・トリッテン (Charles Tritten) の『それからのハイジ』『ハイジのこどもたち』と、フレッド・ブローガー (Fred Brogger), マーク・ブローガー (Mark Brogger) 共著の『ハイジの青春, アルプスを越えて』(The Further Adventures of Heidi) である。

1. シャールル・トリッテン作『それからのハイジ』『ハイジのこどもたち』

シャルル・トリッテンはフランス人の翻訳家で、『ハイジ』の翻訳をも手がけており、『それからのハイジ』は1939年に出版されて、世界中のベストセラーになったという。日本語訳も27版、それにつづく『ハイジのこどもたち』では16版も版を重ねている¹⁾。しかしながら、この作品自体の魅力でそれほどの人気があるのかという疑問は残る。

『それからのハイジ』は、ハイジが14歳になり、クララの通っていたローザンヌの寮生学校へ入学することから始まる。ハイジはそこで学び、親友ジャミーと知合い、夏休みには2人で帰郷する。学校を卒業した後に、ハイジは村の教師になり、荒れた学校を建て直す。おじいさんが年をとってしまったので、ハイジは教師をやめる決心をし、自分のかわりにジャミーを村の教師として迎え、ハイジはペーターと結婚する。大体そういう筋だが、問題とすべき点はいくつかある。まず第4章で、おじいさんがチーズを送ってくると、友人たちのいじめに耐えかねて、ハイジは「一瞬そのチーズを外になげすててしまおうと」²⁾ 思う。フランクフルトでは夢遊病になるほど憧れていたアルプスの生活、おじいさんの作ったチーズはその1部である。山の上の牧場ではパンとチーズをペーターと分けあって食べていた。そのようなハイジが、いくら成長したからといって、チーズを粗末にすることを考えるとは思えないし、アルプスの自然の中で育ったおおらかな彼女がこの種の衝動的な行動をするとは考えられない。第2に、この続編には、ヨハンナ・シュピーリが別の小説に書いていることをそのまま用いている場面が

2箇所ある。ジャミーが十字架を落とし、それが彼女の手に戻るまでを描いた場面は、『山羊飼いモニ』(Moni der Geissbub) から、そしてハイジが教師になり、シェル³⁾という孤児がドクターに引きとられるようになるまでの経過は、『ヒンターヴァルトで』(In Hinterwald) からとられている。この2つの小説には、心の暖かさが善へ導くという、シュペーリの信念ないし教訓が刻み込まれており、別々の小説だからこそ、個々の題材が生きているのに、それを1つの小説の中で、登場人物を勝手にハイジやペーターにしてしまい、果ては結末まで変えて、一緒くたに挿入したために、その魅力が完全に失われる結果になった。

この小説の最後にハイジはペーターと結婚する。そして、それに続くのが『ハイジのこどもたち』である。ハイジに子どもができ、ドクターが亡くなったあとも、ハイジはその屋敷にペーターとブリギッテ、おじいさん、それにジャミーとともに暮らしていたが、やがてジャミーの妹マルタがやってきて一緒に暮らすようになる。マルタは病弱で、愛情に餓えた、かんしゃくを起こす子どもだったが、ハイジやおじいさんにかわいがられるうちに、自分がやっかい者ではないことを感じ始める。ハイジは男女の双子を産み、それからしばらくして、おじいさんは臨終の床につき、マルタに遺品を残して亡くなる。その遺品からやがて、マルタやジャミーのおばあさまとハイジのおじいさんが結婚していたことがわかった。みんな親戚同士なのだとわかると、マルタの両親は安心してハイジにマルタを預ける。3年後にマルタは両親のもとへ帰ることになるのだが、ここでの主役はもはやハイジではなく、マルタである。裕福な家庭の子どもがアルプスにやってきて、心身ともに健康を取り戻す過程がここに描き出される。ただし、クララの支えになったハイジは、ここにはいない。彼女は愛情を持って、やさしく見守るだけである。マルタの成長に手を貸したのは、おじいさんの方だろう。しかし、おじいさんのマルタに対する態度には少々問題がある。マルタがやってきたときに、おじいさんは無愛想で、マルタに「憎い」とさえ言わせてしまう。第10章では、マルタがいちご摘みに出かけ、銅貨を手にして帰ってきたときにおじいさんは、

「おまえはそんなことを考えていたのか？ あのおばあさんに育てられたおまえが！ 貴族のおまえが！ いちご狩りに出してやったら、銅貨を持って帰ってきましたと！ そいつをかんでみる、そうすればどんな味がするかわかる。きつくかんでみる。そうだ。どんな味がする？」⁴⁾

と叱っている。シュペーリの『ハイジ』では、おじいさんがこのように子どもを叱ることは決してなかった。ペーターがクララの車椅子を崖から落としたことに気づいたときも、おじいさんは何も言わなかった。つまり、先に述べた『それからのハイジ』におけるハイジにもこのおじいさんの態度にも、衝動的という特徴がみられる。瞬間的に頭に血がのぼって行動を起こすような人間は、シュペーリの他の小説を見ても1人も登場しない。ゼーゼマン夫人がペーター

を叱ったときや、『コルネリの教育』でのハルム夫人、『グリトリの子どもたち』のドクターの家のおばさんを見ても、シュペーリの子どもの叱り方は、いつも子どもを諭すように、おだやかな口調で行われる。この点からも、そして『ハイジ』の続編と称しながら、シュペーリの他の小説の題材を使っている点からも、この小説がシュペーリの『ハイジ』とはまったく違うものであることが分かるだろう。

2. フレッド・ブローガー、マーク・ブローガー作 『ハイジの青春、アルプスを越えて』

しかし、『ハイジの青春、アルプスを越えて』はもっとひどい。1915年に14歳になったハイジは、イタリアのティラノにあるブルッキングズ女子学園に入学したが、軍隊からの命令と、少佐や知事の陰謀によって、3人の少女とともに孤児院に送られ、石鹼工場で労働を強いられ、それに耐えかねて脱走し、アルプスを越えてアルムに辿りつくという話である。最後にペーターが途中までやってきて、ラブロマンスまで生まれている。すでに最初から、1915年になぜハイジがまだ14歳なのかという疑問が湧く。『ハイジ』が刊行されたのは1880年、そのときには5歳から8歳までの生活が描かれている。それならば、ハイジは1915年には、少なくとも35歳から38歳でなくてはならない。要するに、戦争と結びつけるために、無理に年代まで変えられてしまっているのである。

この小説には、学校を不当に自分のものにしようとする知事、それに手を貸す少佐、孤児たちに強制労働をさせ、学校が知事のものになったら、私立学校を創立しようとたくらむボネリ夫妻が登場する。ハイジたちが過酷な運命に巻き込まれるのは、みな、彼らの悪に満ちた私欲のせいである。悪がなくてはこの小説は成り立たない。しかし本編の『ハイジ』はどうだろうか。まったく逆に、善に満ち溢れている。ハイジは山の牧場でペーターにパンを分けてあげたり、ペーターのおばあさんのためにフランクフルトで白パンをたんすの中に隠しておいたり、自分は何もいないからと、おばあさんのためにフランクフルトからベッドを送って欲しいとゼーゼマン夫人に頼んだりするし、おじいさんはペーターの小屋を無報酬で修理してやる。唯一の悪役を演じるロッテンマイヤー女史でさえ、私欲のために行動するのではない。ハイジに辛くあたったのも、もとをただせばクララやゼーゼマン家のためである。私欲のみならず、戦争まで挿入されたこの小説の世界は、シュペーリの描く『ハイジ』とはまるで別世界のようである。

3. 続編における共通点

これらの続編において、共通する点がある。それはハイジを「田舎者」と卑しめる人物が登場

場することである。『それからのハイジ』では、同室のアイリーンを初め、学友たち、それに校長でさえも、「田舎娘」という言葉を彼女に使っている。『ハイジの青春、アルプスを越えて』で、ハイジはヒラリー先生の乗っている自動車や学校を見て驚いたり、蓄音機に目を丸くし、お風呂に裸で入って学友たちを驚かす。それは、著者がハイジを田舎者として強調するためであろう。しかしシュペーリは、ハイジに「田舎者」という言葉を用いたことは1度もない。大都会フランクフルトでも、ないのである。ロッテンマイヤー女史はハイジの突飛な行動に驚かされ、惑わされ、彼女を理解できないが、それは精神薄弱者だからではないかと考え、「田舎者」という言葉で片付けはしない。シュペーリの『ハイジ』には、田舎と都会という対比はない。自然なのか人工なのかが問題なのである。ハイジが自然により近い子どもだからこそ、彼女に関わりあう人間はみな、彼女に惹かれていくのではないか。その要素を否定するようなことがあってはならないはずである。

『ハイジ』の続編と称するこれらの本が多く読まれたのは、結局のところ、シュペーリの描いた<ハイジ>がどうなったのかを知りたい読者が多くいたためであって、これらの小説自体の持つ魅力のゆえではないであろう。1冊目の『それからのハイジ』と、そのあとの『ハイジのこどもたち』の版数(27版と16版)が大きく食い違っているのはその証明にならないだろうか。前章で、『ハイジ』がもともと第1部だけで完結していたのに、読者からの声にこたえて第2部が書かれたことに触れたが、彼女の書いた『ハイジ』の続編は成功したにもかかわらず、他の著者による続編は失敗に終わったと述べている。ハイジは子ども、それも快活な自然児だからこそ、魅力があるのであって、恋をしたり、結婚したり、ましてや子どもを産んだりした大人のハイジにはもはや何の魅力も感じ得ない。

注

- 1) シャルル・トリッテン作 各務三郎訳 『それからのハイジ』 1979年
『ハイジのこどもたち』 1980年 いずれも読売新聞社発行。
- 2) 上掲書 『それからのハイジ』 S.45.
- 3) シュペーリの原作ではヘルだが、続編はフランス語で書かれているために、その翻訳ではシェルとなったものと思われる。
- 4) 前掲1) 『ハイジのこどもたち』 S.134.

II. アメリカで制作された映画の問題

ここで問題とするのは日本で1996年にNHKで放送された映画である。これは1993年にアメ

リカで制作されたものだが、ドイツ語版のビデオも発売されている。一番近年に制作されたものだろうが、これはシュペーリの『ハイジ』とはまったく別物になっているとっていいだろう。

1. アルムの山における生活の相違点

まずこの映画の最初の場面の問題点から述べてみたい。ハイジの父——英語版ではなぜかジョンという名前になっている——がおじいさんと今後の山での生活について言い争っている。そして仲違いの末、ハイジの父とハイジを抱いた母アーデルハイトが山を降りていこうとするが、その時突然の落雷で倒れてきた大木の下敷きになって、父と母は死んでしまう。この事件のため、おじいさんは山に引きこもり、まるで「鬼みたい」で、「夜になると山がぶるぶる震えるくらい大声で吠えている」、「あれはきっと悪いことをした報いだ」と噂されている。この2人が死んでしまったのは、自分のせいだとこの映画の最後でおじいさんもはっきりと言っている。この場面は山に引き籠もってしまった理由づけのために創作されたに違いないが、原作ではハイジの父トビアスは大工で不慮の事故に遭って亡くなり、もともと病弱だった母アーデルハイトはその後に病気で亡くなっている。おじいさんが山に引き籠もった理由も全く書かれていないわけではない。このことはすでに第1巻の第1章でデーテの口から明らかになっている。

「……ドムレシュクでもいちばんの農場をもっていたのよ。おとうとがいたんだけど、おとなしくて、まともな人だったわ。おじさんのほうはいばりくさって、馬車をのりまわしちゃ、いかがわしい連中とつきあうばかりで、とうとう、かけごとやお酒で、家までなくしてしまったの。それがわかると、おとうさんもおかあさんも悲しみのあまり、つぎつぎに死んでしまい、おとうとも落ちぶれて、はらだちまぎれにどこかにとびだしたまま、かえってこなかったわ。

おじさんのほうも、すっかり評判をわるくしてすがたをけし、はじめは、どこへ行ったかわからなかったけれど、ナポリで兵隊になったという話だったわ。

それから十五年、ゆくえがわからなかったあとで、とつぜん、かなり大きくなった男の子をつれて、またドムレシュクにあらわれ、子どもを親類にあずかってもらおうとしたの。ところが、だれもかれも、ドアをぴしゃりとしめて、ぜんぜん知らぬ顔をした、というわけよ。おじさんはひどくはらをたてて、ドムレシュクなんかに、もう二度と足をふみいれるもんかと、たんかを切ったの。そして、このデルフリ村にやってきて、男の子といっしょにく

らしたのよ。

おくさんには知りあってからまもなく、死なれたらしいのね。お金もまだのこっていたらしいわ。トビアスっていう男の子に手職をならわせて、大工にしたんですもの。この子はちゃんとしていて、デルフリ村ではみんなにすかれていたわ。でも、おじさんのことはだれも信用せずに、あれはナポリで脱走兵になったんだ、人を殺したんだから、脱走でもしなきゃひどい目にあわされたろう、なんていってたわ。人を殺したっていうのも、けんかでのよ。……」¹⁾

おじいさんは「放蕩息子」だった。だからこそハイジは第1巻の終わりで「放蕩息子」のお話を読んで聞かせ、おじいさんを社会復帰させることに成功するのだ。この映画ではおじいさんが社会復帰することはない。おじいさんは神とも牧師とも村の人とも和解することはない、ただハイジがおじいさんのもとにとどまることができるようになる、というだけの結末を迎える。前回に述べたようにおじいさんの社会復帰はシュピーリの最も重要視した第1部のクライマックスだったはずだ。

おじいさんもシュピーリの描き出したおじいさんとは全く別人だ。ハイジが初めて山に連れてこられた日、デーテ——原作ではただデーテと呼ばれているが、この映画ではデーテ・ルガントという名前が創作されている——が小屋の中に入ると、口論する大きな2人の声が聞こえ、そしておじいさんが投げつけたのだろうか、何かが割れる音がして、デーテが叫び声を上げて逃げるように山を降りていく。ハイジはすっかりおじけづいて小屋の中に入ると、物乞いをするような目つきで、ここにいさせてほしいと懇願するが、おじいさんはハイジに対してもヒステリックに怒鳴り散らし、侮辱的な言葉をはき、グラスを床に叩きつけ、彼女を受け入れることはない。ハイジはその夜、無造作に散らばっている干し草の上で泣きながら眠る。翌日には子ヤギをめぐって2人の喧嘩が始まるが、ハイジは意地をはり、こうおじいさんに向かって叫ぶ。

「なんでおじいちゃんが一人だかわかったわ。本当にいじわるだからよ。誰もおじいちゃんと住みたがらないはずよ。誰もね！」

シュピーリの描き出したおじいさんは威厳のある人間である。共同体から孤立してはいるが、決していじわるでもなければ、ヒステリックでもない。ハイジに怒鳴ったり、罵声を浴びせたりすることは一度もない。ハイジが山にやってきた日も一緒に干し草のベットを作ったり、食事の支度をしたり、穏やかな時間が流れている。

そもそもおかしいのは、山にやってきた時ハイジはすでに8歳になっていることである。そのためすべてのつじつまがあわなくなっている。厚着をさせられてほおをほてらせながら一生懸命に山を登っていく5歳の子供らしい、かわいらしい、ユーモアに溢れた姿や、途中でそれを脱ぎ捨てて、下着一枚になって飛びまわる姿や、ペーターのおばあさんの目が見えないことを知って、泣きじゃくる純真な姿がここにはない。妙に言い訳を試みたり、大人の噂を耳にして憎まれ口をたたいたりする。

そしてアルムでの冬の生活が描写されていないことから、ハイジがほんの数週間か、長くても数ヶ月後にフランクフルトへ連れていかれることが容易にわかる。原作ではアルムでの生活の一部として、おじいさんとそりに乗って、ペーターのおばあさんを訪ね、おじいさんが屋根を修理するという話が述べられているのだが、それは冬の強風で家がガタガタいっておばあさんが恐がるからこそ行われたことである。しかし映画ではどうしてもこの屋根の修理というモチーフを入れたがために、ある雨の日に突然おばあさんを訪ね、雨漏りのために修理するという事になっている。冬を越してしまうとフランクフルトに行く時に9歳になってしまうからであろうか。

大急ぎでフランクフルトへ行くために、牧場で過ごす場面が非常に少ない上に、あの大事なモミの木がどこにもない。ということは当然フランクフルトで馬車の音をモミの木のざわめきと間違えることもなくなった。山の上に滞在した期間が短い上に、アルプスの自然を象徴するものがなにもない状態では、ハイジがホームシックになる真実味がうすれてしまっていないだろうか。

2. フランクフルトにおける生活の相違点

フランクフルトの生活で一番目についたのは、デーテがハイジをゼーゼマン家に送り届けた時、ハイジの目の前でロッテンマイヤー女史から金を受け取ったことである。ここで一種の人身売買がおこなわれてしまったといっても過言ではないだろう。金銭のやりとりはこの時だけではない。ハイジが山に帰される時にもデーテが呼ばれ、謝礼をもらってハイジを送り届けている。さらに山に着き、ゼーゼマン氏——彼も映画では原作にはない、アルバートという名前で母親から呼ばれている——からことづかった金の入った封筒をおじいさんに渡すのだが、おじいさんが怒ってそれを火の中に投げこむと、「何やってるの、もったいない！」と叫んでそれを慌てて拾い上げ、手中に収めて山を降りていってしまう。原作でも確かにこの時にゼーゼマン家からお金を渡されるのだが、この金はペーターのおばあさんに毎日1つずつ白パンを買ってあげるという素敵なハイジの思いつきのために使われることになるのであって、決して私欲のためのお金ではない。こうしたデーテをめぐる、生々しい金銭のやりとりによって、シュ

ペーリの善に満ち溢れた世界が著しく汚されてしまったといえる。

ペーターのおばあさんのために白パンを洋服だんすいっぱい集めていたのだが、ロッテンマイヤー女史に見つかって全部捨てられてしまい、絶望して泣き出すという「白パン」のモチーフがこの映画には存在しないのは非常に残念である。フランクフルトに来てから2度ほど、テーブルからパンをとって膝の上におき、それがほんの一瞬、洋服だんすの中にある——それもよほど気をつけていなければパンだということはわからない——のが映し出されるだけで、ハイジが旅立つ日にクララが白パンの入った包みを渡す時まで全く出てこない。それも約束する場面がなかったにもかかわらず、「憶えていてくれたのね。」とハイジが言っているのは本当におかしな話である。

クララも感情の激しい、我が儘なおじょうさまに変えられている。病気も小児マヒで歩けなだけでなく、ハイジが山に帰りそうになるたびに、ヒステリックに叫んで興奮し、喘息の発作を起こすのだ。

クララのおばあさまはここでも単に全く宗教性のない絵本を与えて、字を教えるだけで、お祈りすることは教えない。ハイジは、クリスマスの日、星にお祈りするものの、神に祈ることもないし、ペーターのおばあさんに読んであげるのも、聖書ではなく、フランクフルトから持ち帰った絵本である。さらにペーターに字を覚えさせることにも成功しない。いったい何のために字を覚えたというのだろうか。それにおばあさまは別宅に帰ることはなく、ハイジが山に帰る時までずっとフランクフルトのゼーゼマン家に居続ける。そのためにロッテンマイヤー女史の影も薄れている。いつもうるさく叫んでいる、女中頭程度の役割しか果たしていない。彼女がハイジに厳しく良家のしきたりを教えたり、自然児ハイジをしめつけたりすることもなく、ハイジの味方であるおばあさまがずっとそばにいたのに、なぜハイジは夢遊病になってしまったかという疑問が残る。おばあさまがいなくなって、楽しい日々が終わり、窮屈な生活に戻ったからこそ、ハイジは病気になってしまうのではないか。

ハイジは3ヶ月後、夢遊病になって山に帰されるが、クララの我が儘のために、1ヶ月間だけの期限付きの帰宅だ。ハイジは無理矢理1ヶ月後には帰ってくると約束させられて、やっと山に帰してもらえる。しかしこのことが最後まで影響を及ぼしている。おじいさんはハイジをまた連れて行ってしまう憎き相手と思い込み、最後までゼーゼマン一家には冷たい態度をとりつづけるのである。

3. 2度目のアルムにおける生活での相違点

ここでペーターのおばあさんについて述べてみたい。フランクフルトからクララのお医者さまがやってきて、ペーターのおばあさんを診察するが、おばあさんはその直後に死んでしまう。ご丁寧に葬式の場面まである。死ぬ間際におばあさんは次のようにいう。

「……ハイジには特別な力があって、ハイジが来ると周りが明るくなる。どんな人でも幸せにしてしまう。でもひとつ間違えるとハイジが疲れてしまって心が空っぽになってしまう。そうなっちゃたいへん。だから約束して。どんなにつらくても、自分の本当の気持ちをよく考えて、自分を大切にする。あきらめちゃいけないよ。どんなことがあっても。……」

確かにハイジには不思議な力があってみんなを幸せにする聖女だ。しかしここでいうように、ハイジは決して自分のことだけを考えることはないのだ。『ハイジ』は善と幸福に満ち溢れていなければならない。唯一の苦悩はハイジのフランクフルトでのホームシックだけだ。最後にはみんな幸せになる、というのがシュペーリの小説の土台である。それにはペーターのおばあさんはなくてはならない存在であったはずだ。原作では、ハイジはゼーゼマン家から、クララが立てるようになった感謝のしるしとして、自分のためではなく、おばあさんのために自分の使っていたベットをフランクフルトから送ってもらう。おばあさんも含めて、みんなが幸せになるのだ。それにこの小説の最後はおばあさんの次のような言葉で終わっているのだ。

「最後におばあさんがいいました。

『ハイジ、わたしに賛美歌を一つ読んでちょうだい。もういまでは、神さまをほめたたえ、神さまに、わたしたちのためにしてくださったことのお礼を、もうしあげるしかないような気がするんですよ。』²⁾

最後まで非常に重要な役割を果たしているおばあさんが、いったいどうして死んでしまうことになったのだろうか。

その上、この映画ではラブストーリーまで創作されてしまった。クララのお医者さまはクララより一足先にくるのだが、その間にどうも山の上には来ていないようである。クララが山に来た時、デーテを案内役として——ただし彼女はおじいさんを避けてか、小屋のすぐ前で引き返すのだが、そもそも彼女が再び山にやって来るといことがおかしい——、クララのおばあさま、ロッテンマイヤー女史、セバスチャン、お医者さま、それにペーターの母ブリギッ

テまでもが一緒に登ってくる。そこでハイジは全員をおじいさんに紹介する。つまりお医者さまも初対面ということだ。それならば彼が何のために先に来たのだろうか。いったいどこに滞在していたのか。おばあさんの診察のために来たことになっているが、それだけではないようだ。実は彼はクララたちがくるまでの短い間にブリギッテと恋仲になっている。ブリギッテは明るく若くて美しい女性になっている。おばあさんの世話をする必要がなくなったからなのか、それまではまるで存在感がなかったのに、このあとお医者さまの登場する時にはいつもそばにいる。お医者さまも原作のように男やもめには見えない。どうみても若い独身男性である。当然原作のように、ハイジが一人娘を亡くしたばかりの彼の苦しみを和らげることもなければ、養女になることもない。そのあとの2人がどうなったのかわからないが、クララがフランクフルトに帰る時、一緒に汽車に乗っていないのは確かだ。

原作における道徳的なモチーフも削除されてしまった。それはペーターがやきもちをやいてクララの車いすを突き落とすというお話である。確かにペーターは車いすを突き落とすのだが、原作のように、しばらくの間どんなおしおきがあるのかとびくびくすることはなく、むしろそのことを言ってクララをいじめるだけで、全く反省しない。正直に告白し、反省することに意義があるはずだが、ここでは悪いことをしてもなんの罰もないのだ。おもしろおかしくするためのためにこのモチーフがつかわれてしまったといえるだろう。

クララが歩けるようになった場面もまったくおかしい。子供たち3人は山の牧場に行き、そこで口喧嘩が始まる。ハイジはおばあさんの遺言にしたがい、山の牧場でフランクフルトには行きたくないという自分の意志をクララにはっきりと伝えることができるのだが、クララはハイジに「嘘つき！」とヒステリックに泣き叫び、ハイジの頬を打ってしまう。ハイジは駆け出すと足を滑らせ、危うく崖から転落しそうになる。クララは必死になってペーターと協力してハイジを助ける。そのことがきっかけで突然足が動くようになったらしい。ハイジに励まされる場面もなく、山から降りてきて、突然立つだけでなく、ゼーゼマン氏の前で歩いてみせる。さらにそれからほんの数時間しかたっていないのに、マイエンフェルト駅ではもう完璧に歩いているのはいったいどういうことなのだろうか。

以上のように登場人物がみな感情が激しく、出来事も変化に富み、つじつまのあわないところも多数見られる。最初から最後までシュペーリの描き出した『ハイジ』とはまったく別物である。シュペーリの小説の大きな魅力の一つは、作品中にいつもほのかな愛が漂っていて、それが読者に安心感を与えているということなのだが、この映画にはその世界が欠けている。この映画はシュペーリの世界を著しく乱しているといえるだろう。

注

- 1) 関楠生訳『アルプスの少女』1988年 童心社 S.10-11.
- 2) 上掲書『アルプスの少女』S.372.

III. アニメの問題

1. アニメーションとそのテキスト

『ハイジ』は何度かアニメーション化され、ビデオになっているが、その1つはサンリオの人気キャラクター、キティちゃんをハイジに仕立てたもの¹⁾で、前半のごく1部しかないし、もう1つも全体をわずか30分でまとめたもの²⁾であるから、1通りの筋を追っているものの、ほんのかいなでに過ぎず、問題とするに足りない。原作との比較に値するのは、1974年にフジテレビで製作されたもの³⁾だけである。ところが、これは他の2つと違って52話もある長編で、逆に、原作にはないエピソードがいくつも詰め込まれている。しかも、注目すべきことにこの『ハイジ』は、ドイツに逆輸出されて好評を博し、日本版になかったテキスト⁴⁾までが付加・出版されているのである。日本製のアニメをそのままさしえに使っていながら、このドイツ語のテキストと、もとのアニメの間には所々に食い違いが見られる。しかし、文字になっているのはドイツ語の方だけであるから、ここではこれを主体に見ていくことにしたい。原作との比較が、シュペーリの『ハイジ』の特質と魅力を浮かび上がらせるのに役立つのではないか、と思われるからである。

2. 時代設定

まず、時代設定の問題がある。そう言うと、変に聞こえるかもしれない。ハイジの生きた時代は、シュペーリがこの小説を書いた時代、すなわち19世紀後半ではないのか、と。たしかに、アニメーションを見ていてそれを疑う理由はないのだが、テキストの方ではそれが少々おかしいのである。最初にデーテがハイジをアルプスのおじいさんのところに連れて行くとき、汽車とバスを使ってマインフェルト——実在の地名で、シュペーリも Maienfeld と書いている町をなぜ Meinfeld にしたのか、その理由はわからない。他にこんな扱いを受けている町はないのだ——まで行き、そこから歩いて、デルフリ村を経てアルムの小屋に達する。原作の時代にバスがあるわけではない。しかも、バスが出てくるのはこのときだけではないのである。デーテがハイジと共にフランクフルトに行くときにも、マインフェルトからバスで町——die

Stadt と書かれるだけで、どことも特定されていない——へ行って、そこで汽車に乗り、バーゼル経由でフランクフルトに向かう。ところが、ハイジがセバスチャンに連れられてフランクフルトから帰ってくる時は違うのである。

「まもなく2人はバーゼルに、最後にマインフェルトに着いた。終着駅である。駅前広場で2人はデルフリのパン屋に出会った」

>> Bald haben sie Basel erreicht, schließlich Meinfeld. Endstation. Auf dem Bahnhofsvorplatz begegnet sie dem Bäcker vom Dörfli. <<⁵⁾

これは原作と同じで、ここにはバスの影もなく、鉄道を利用したとしか考えられない。ところが、あとでフランクフルトから訪ねてきた医者も、またバスに乗ってくるのである。デルフリの村人はハイジの問いに答えて言う。

「その人（医者のこと）なら、今朝着いたよ。私は彼がバスから降りるのを見た」。

>> Doch, doch der ist heute früh angekommen, ich habe ihn aus dem Bus steigen sehen..... <<⁶⁾

その村人は、おじいさんの小屋に行く道を教えたというのだから、医者はデルフリまでバスできたことになる。実にいい加減というほかはない。現代化したのかもしれないが、それなら、フランクフルトから引き揚げるハイジが駅まで、ヨハンが御者を務める馬車に乗って行くのはどうしたことなのか。また、ハイジがペーターのおばあさんへのおみやげにした白パンは、その日の朝、小間使いのティネツテが買ってきたものだった。そして、ハイジは暗くならないうちに小屋まで登って行くのだから、フランクフルトから丸1日もかかっていないことになる。そんなに早く帰れるはずはない。原作では、ハイジとセバスチャンは、途中のバーゼルで1泊しているのである。

3. 叔母デーテ

次にデーテの扱い方を見てみたい。彼女はシュペーリの原作では、開巻劈頭、ハイジをアルムのおじいさんのもとに預けに行く。そしてその数年後に、今度はフランクフルトのゼーゼマン家に連れて行くために、またおじいさんのところに現れ、首尾よくハイジをゼーゼマン家に送り届けてから、ぱったり姿を見せなくなる。再び彼女が登場するのは、ハイジをスイスに帰

してやるときで、これが最後である。デーテは終始、好意的には描かれていない。最初はいきなり子どもをおじいさんのところに連れてきて、好き勝手なことを言って、置いていってしまう。そのときは、「近いうちにまた姿を見せたら承知しないぞ」と言われていながら、4年後にまたやってくる。彼女の言うところでは、またおじいさんのところから連れ帰ろうと始終考えていたが、たまたまいい話があったので迎えにきた、ということである。どうも、いい子がいたら連れてきてほしいと、ゼーゼマン家から多分相当なお礼をもらって頼まれたのではないか、と思われる。それで彼女はおじいさんと喧嘩し、半ばだますようにしてハイジを連れ出した。ゼーゼマン家に着くと、ロッテンマイヤー女史のごきげんがよくない。12歳のクララと同じ年頃の子を、と望んだはずなのに、ハイジが8つにしかならないことが分かったからである。デーテは必死になってごまかし、ハイジを置いて、逃げるように出て行ってしまふ。そして、いずれ様子を見にくると言いながら、ついに、ハイジが帰されるときになるまで姿を見せないのである。そのとき、彼女はゼーゼマン家に呼ばれる。何かいい話ではないかと期待してやってきたところが、思いもかけず、ハイジを連れて帰ってくれという話である。デーテは、おじいさんと喧嘩してきたことでもあり、ありがたくない話だと思って、必死に逃げを打つ。ゼーゼマン氏はその様子を見てデーテの気持ちを知り、召使のセバスチャンに送らせることにする。自分の利害のためにのみ動くこういうデーテを、アニメのテキストは、少しでもいい印象を与えるように変えようとする。まず、最初のところで、デーテがハイジをおじいさんのところに置いて行くが、そのとき彼女は、ハイジにキスをして抱きしめた。それは

「別れをつらく思っていることを見せたくなかった」

>> daß Tante Dete der Abschied schwer fällt. <<⁷⁾

からである。それから、フランクフルトへ連れて行くために迎えにくるときには、いきなりではなく、近日中にハイジを連れに行きたいという手紙をあらかじめおじいさんあてに出している。こういうデーテに、ハイジが悪い感情を持つはずがない。原作では、ハイジがデーテをどう思っているかについてはまったく触れられていないが、テキストは、デーテが再び現れたとき、

「ハイジはペーターと一緒に牧場から戻ってきて、デーテに会えるのを嬉しく思った」

>> Als Heidi mit Peter von der Alm zurück kommt, freut sie sich, Tante Dete wiederzusehen. <<⁸⁾

と書き、フランクフルトに行ってから、ハイジはクララを誘うのに、

「デーテおばさんと一緒にスイスへ行きましょうよ。初めは汽車、次にバスで」

>> Wir fahren mit Tante Dete in die Schweiz. Zuerst mit dem Zug, dann mit dem Bus..... <<⁹⁾

と言っている。そしてデーテが登場する最後の場面で、原作では彼女がああでもないこうでもない、ペラペラ逃げ口上を述べ立てるのに、テキストではきわめて短く、

「デーテおばさんは残念ながら暇がなく、そのためセバスチャンがハイジの旅について行くことになった」

>> Tante Dete hat leider keine Zeit, deshalb wird Sebastian Heidi auf der Reise begleiten. <<¹⁰⁾

と書くだけである。このように、デーテに関する双方の叙述を読み比べると、テキストは、デーテの与える悪印象を何とかして打ち消そうとしているかのように見える。

4. ロッテンマイヤー女史

次に、ロッテンマイヤー女史である。硬直した市民道徳、ブルジョワのしきたりを金科玉条として、というよりは、その正しさにわずかの疑念も抱かず、自然児ハイジをことごとくに締めつけ、ついには夢遊病にまで追い込むロッテンマイヤーの厳しさも、テキストではいささか緩みを見せる。すなわち、ハイジがいよいよ山に帰るとき、

「あのきびしいロッテンマイヤーさんがやさしく微笑み、旅の無事を祈った」し、

>> Siehe da, auch das strenge Fräulein Rottenmeier lächelt freundlich und wünscht ihr gute Fahrt. <<¹¹⁾

ハイジが行ってしまうと、

「鼻水をすすり、目をこすった。『目にごみが』と彼女はつぶやいた。誰にも涙を流していることを知られてはならなかったのだ。というのは、正直に言えば、ロッテンマイヤーは、ハイジが少し好きになっていたことを認めないわけにはいかなかったのである。」

» Fräulein Rottenmeier zieht die Nase hoch und reibt sich die Augen. “Mir ist etwas hin eingeflogen”, murmelt sie. Keiner soll wissen, daß auch sie feuchte Augen bekommen hat. Denn wenn sie ganz ehrlich ist, dann muß sie zugeben, daß sie Heidi schon ein bißchen liebgewonnen hat. <<¹²⁾

これもまた、ロッテンマイヤーの印象を和らげようとしてのことであるが、原作と違って、あとで彼女をアルプスに行かせなければならない必要から、こうしたのかもしれない。彼女の変貌はそれに止まらない。彼女は権威のある家政婦であるばかりではなく、クララとハイジに勉強を教える家庭教師でもあるのだ。おそろしく回りくどい、ペダンティックでユーモラスな家庭教師は姿を消し、ロッテンマイヤーが教師を兼ねるためにいよいよ厳しさを増すことになる。それをいわば調節しようという考えから、彼女にも多少の人情味を与えたのであろう。また、原作では、当然のことではあるが、彼女は主人のゼーゼマン氏とその母であるゼーゼマン夫人には絶対服従であるのに、テキストでは、この2人によって、家庭内で振るう自分の権力が制限されるのがいまいましてならず、しばしば反抗的な態度を見せ、そういう言辭を弄する。そして、主家のお嬢さんであるのに、クララに対する厳しさはハイジに対するのと同じようである。この態度は、原作にはまったく見られない。あとでアルプスに行ってから彼女の演じる滑稽な役割を思い合わせると、デーテの場合と同じく、ロッテンマイヤーの悪い印象を和らげようと配慮してのことではないか、と推察される。

5. 原作への補足

大体アニメーションでもすでにそうであるが、テキストになるとますます、説明的な場面あるいは文章を付け加えて、原作を補完しようとする試みが目につく。たとえば、原作を読んでいると、ハイジとおじいさんは、山羊のミルクとチーズ、パンしか食べなかったのだろうかという疑問が湧く。すると、テキストに、肉やソーセージは高価だから日曜と祭日にしか食べられない、という記述が見つかるし、フランクフルトでのハイジは、原作では教会の塔に行ったことくらいしかないので、アニメーションやテキストでは、クララと一緒に「おばあさま」に連れられて馬車で森にピクニックに行ったり、公園で花を摘んだり、蝶をつかまえに行ったりし、テキストではさらに、ゼーゼマン氏にも動物園やサーカスに連れて行ってもらっている。

おばあさまも、ハイジに信仰を説き、お祈りを教えるなどという面倒なことをせず、いきなり熊のぬいぐるみを着て現れたり、コップを叩いて音楽の演奏をしたりする。ハイジにはずいぶんとくさんの楽しみが与えられ、ロッテンマイヤーに叱られるのもクララと一緒にいる。たとえば、アルムに帰ったハイジは、朝食のときに、

「姿勢を正しく！ ナイフを絵筆のように持つんじゃない。噛むときには口を閉じなさい。」

» Sitz gerade, Kind! Halte das Messer nicht wie einen Pinsel! Und mach den Mund zu beim kauen! <<¹³⁾

と今頃ロッテンマイヤーがクララに言っているだろうと想像する。こんな調子では、ハイジが夢遊病になるのは難しいだろう。

しかし、原作とアニメーション及びテキストとの最も大きな相違は、登場人物に関していえば、ヨーゼフの創作であろう。セントバーナード種のこの犬のせいで、原作にはないエピソードが数多く挿入され、全体の分量が飛躍的に増大した。1例をあげれば、猟にきた町の男が遭難しそうになるのを助けるには、どうしてもこの犬の活躍が必要であるし、ハイジのかわいがっていた小鳥を、そしてまた冒険好きの山羊を、危険から救うのもみんな、ヨーゼフの仕事である。ただし、この犬がいるために、山の上における、おじいさんとハイジ2人だけの生活の孤独が薄められてしまうことも否定できない。

6. 宗教性の欠如

さらに重大なもう1つの相違は、宗教、キリスト教の欠落である。アニメーションは日本製であるし、われわれがシュペーリの『ハイジ』を読んでも、お説教が多過ぎるという感じは否めないのであるから、これを全部省いたのも無理からぬところがある。しかし、それに付されたものだとはいえ、ドイツ語のテキストにも、同じくキリスト教がまったく出てこないのは、やはり不思議である。アニメーションにないことが、テキストに書かれている場合もあるだけに、その思いを禁じ得ない。こうして、原作のいわば骨格を外して、創作したエピソードを多数加え、娯楽作品に仕立てようとしたのであろうが、それらのエピソードの中には、たとえば、山羊の「雪ちゃん」がミルクを出さないので屠殺されそうになる話や、教会のお祭——教会の、というだけで、キリスト教とは何の関係もない、鎮守の祭礼のようなもの——、そり競争など、何の意味もないのはいいとしても、お話としてもさっぱりおもしろくないものがあって、そういう試みが成功しているとは言い難い。逆に、ユーモラスな家庭教師がいなくなった、ペーターがやきもちをやいてクララの車椅子を突き落とし、そのことでびくびくする話が

省かれたりしているのは惜しい。ペーターと車椅子にまつわる話は、どうも、みんな仲よく——それも初めから終わりまで——という基本線から外れるために省かれたようである。

キリスト教の欠落は、作品に大きな影響を及ぼした。ハイジに放蕩息子の話をして聞かせて、信仰と祈りと同時に字を教えたおばあさまが、ただ本を読んで聞かせて字を教えるだけの存在になった。そうすると、ハイジがアルムに帰っておじいさんに信仰を取り戻させるきっかけが失われてしまうのだ。それは、『ハイジ』の第1部、『ハイジの修業と遍歴の時代』の眼目であったはずである。

総体的に見ると、アニメーションとそのドイツ語のテキストは、全体を娯楽作品に仕上げるために、宗教的な要素を落として娯楽的なエピソードを数多く入れ、分かりやすくするための説明を加えて、内容が多岐にわたる結果となった。そうなってみると、うるさ過ぎる感のあったお説教も、完全に失われてしまえば、自然児ハイジの修業と遍歴の時代の明るさ、アルムおじの孤独や頑固と共に、作品を支える単純ながら強靱な骨格として欠かすべからざるものであったことが、改めてはっきりする。シュペーリの原作とアニメーションに付されたテキストとの根本的な相違は、要するに、芸術作品であるか否かに帰着するように思われる。

(本学講師＝ドイツ語担当)

注

- 1) 『ハローキティのアルプスの少女ハイジ』 1993年 星山博之脚本，サンリオ
- 2) ビデオ絵本『アルプスの少女ハイジ』 1988年 ウォーカーズカンパニー
- 3) 『アルプスの少女ハイジ』 1974年 高畑勲演出，佐々木守脚本，宮崎駿構成（場面・画面）
- 4) Johanna Spyri: Heidi, Stuttgart 1987.
- 5) A.a.O., S.84.
- 6) A.a.O., S.97.
- 7) A.a.O., S.9.
- 8) A.a.O., S.48.
- 9) A.a.O., S.76.
- 10) A.a.O., S.83.
- 11) A.a.O., S.84.
- 12) A.a.O., S.84.
- 13) A.a.O., S.89.

参考文献

- Doderer, Klaus : Klassische Kinder- und Jugendbücher (Weinheim und Basel 1969).
Doderer, Klaus : Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur (Weinheim und Basel 1975-1982).
Dyhrenfurth, Irene : Geschichte des deutschen Jugendbuches (Zürich und Freiburg i. Br. 1967).
Hürlimann, Bettina : Europäische Kinderbücher (Zürich 1959).
(『子どもの本の世界』 野村滋訳 1969年 福音館書店).
Köster, Hermann Leopold : Geschichte der deutschen Jugendliteratur (Braunschweig 1927).
Spyri, Johanna : Gritlis Kinder (München o. J.).
Spyri, Johanna : Heidi (Düsseldorf 1969).
Spyri, Johanna : Heidi (Menden o. J.).
Spyri, Johanna : Heidi (Stuttgart 1987).
Spyri, Johanna : Schloß Wildenstein (Reutlingen o. J.).
Spyri, Johanna : Was aus ihr geworden ist (Gotha 1889).
Wild, Reiner : Geschichte der deutschen Kinder- und Jugendliteratur (Stuttgart 1990).
- ヨハンナ・スピリ作 池田香代子訳 『アルプスの少女』(1987年 講談社)
大野芳枝訳 『アルプスの少女』(1985年 集英社)
岡信子訳 『あるぶすのしょうじょ』(1992年 金の星社)
関楠生訳 『アルプスの少女』(1975年 学習研究社)
関楠生訳 『アルプスの少女』(1988年 童心社)
中村妙子訳 『アルプスの少女ハイジ』(1991年 講談社)
平田昭吾訳 『アルプスの少女ハイジ』(1991年 永岡書店)
若林ひとみ訳 『アルプスの少女ハイジ』(1987年 ポプラ社)
野上彌生子訳 『アルプスの山の娘』(1920年 岩波書店)
武鹿悦子訳 『ハイジ』(1993年 チャイルド社)
- フレッド・ブローガー, マーク・ブローガー 堀内静子訳 『ハイジの青春 アルプスを越えて』(1990年 ハヤカワ書房)
- シャルル・トリッテン作 各務三郎訳 『それからのハイジ』(1979年 読売新聞社)
シャルル・トリッテン作 各務三郎訳 『ハイジのこどもたち』(1980年 読売新聞社)
荒井冽 『名作に学ぶ生き方<西洋編>』(1990年 あすなろ書房)
NHK取材班 『アルプスの少女ハイジ, 夢紀行』(1990年 日本放送出版協会)
国松孝二編 『スピリ少年少女文学全集』(1960-1961年 白水社)
国松孝二, 高橋義孝編 『現代世界文学講座4 ドイツ編』(1956年 講談社)
高橋健二 『シュペーリの生涯』(1972年 彌生書房)
高橋健二・矢川澄子 『アルプスの少女ハイジ, スイスメルヘン紀行』(1992年 求龍堂)
日本独文学会編 『ドイツ文学辞典』(1956年 河出書房)
波多野完治・島田謹二監修 『世界の児童文学』(1967年 国土社)
『平凡社 大百科事典 第4巻』(1984年 平凡社)